

第6学年1組 社会科授業案

指導者 伊藤 篤史

1 日 時 平成21年7月8日(水) 第5時限 場所 6の1教室

2 単 元 名 「波瀾万丈な戦国武将 戸田氏」

3 単元目標

- (1) 戦国時代の諸大名の生きざまや、波瀾万丈の道をたどった戸田氏変遷の過程を、聞き取り調査や見学活動などを通して、意欲的に調べようとする。(関心・意欲・態度)
- (2) 下剋上・政略結婚・人質を出すことなどが当たり前のように行われていた激動の時代の中で、戸田氏をはじめ諸大名が生きのびるためにいかに様々な決断をしてきたかを知ること、それぞれが懸命に生きてきた姿を考えることができる。(思考・判断)
- (3) 地図・文献資料からの調べ学習、地域の人々・学芸員への聞き取り調査などから、戸田氏をはじめ戦国時代に生きた諸大名の生きざまについて調べたことをまとめ、説明することができる。(技能・表現)
- (4) 戦国時代の日々刻々変わる状況の中で、それぞれの大名が数々の究極の決断を繰り返しながら、天下が統一されていく様子をとらえることができる。(知識・理解)

4 単元設定の理由

(1) 児童観

本学級には、男子を中心に歴史好きな子が多く、5年生の頃より「早く歴史の勉強がしたい」と言っている子もいた。日頃の様子を見ても、読書で歴史の本を好んで読んだり、自主学習を促すと何ページにもわたって教科書に出てくる人物をまとめたりする等、歴史に対する関心は高いと言える。一方で、歴史事象を結果のみに着目して表面的にとらえ、その事象にかかわる様々な立場の人々の思いや願いとかかわらせて考える子は多いとは言えない。「聖武天皇と奈良の大仏」の学習でも、大仏の大きさを調べたり、運動場に書き表したりする活動には意欲的に取り組む子が多かったものの、大仏を建立した当時の時代背景や人々の思いと結びつけて考える子は少なかった。

学年当初から、子供たちがかわり合う授業を意図し、社会科においても子供たちの考えを問う場面を設定してきた。子供たちは、資料集やインターネットを使って調べたことを、意欲的に発言することができる。ただ、話し合いの内容は、調べた事実の出し合いが中心になりがちで、資料から構築された個々の考えや思いが十分にかかわり合いになっていないことを感じた。

東田校区は、仁連木城や全久院、東田神明宮など歴史的建造物が数多く存在する地域である。本校では、運動会で行う騎馬戦・鈴割りのことを、かなり前から「はじかみヶ原の戦い」と呼んで親しまれてきた。しかし、それが仁連木城を舞台とした、武田軍と徳川軍の戦いであり、長篠の戦いの前哨戦であったことをくわしく知る子はいなかった。また、その仁連木城についても、誰がいつ建てたのかについて答えられる子もほとんどいなかった。そこで、校区にある仁連木城にかかわる人々を単元の中心に据え、子供たちのもつ断片的な知識を、自分の考えの手がかりにするような問題解決の場を設定することで、歴史的事象と現代とを連続性の中でとらえたり、当時の人々の営みと自分の生活をつなげて考えたりできるようにしたい。

(2) 教材観

○戸田氏

戸田氏は、その初めは藤原氏の系統であるとされる。応仁の乱に乗じて、宗光は、知多の河和・富喜・師崎の三港をおさえ、渥美半島の犬伏(豊橋市老津町)に拠点を移し、三河湾の制海権を手中に治め、文明12年(1480年)頃田原城を築き、一色氏に代わり半島の支配権を得た。

田原戸田氏始祖となった宗光は、領土拡大を企て、西の今川氏、北の牧野氏に対抗するために、交通の要所でありかつ難攻な地形の仁連木に「仁連木城」を築城した。程なく宗光は今川氏との戦いに敗れ戦死し、その子である田原城主二代憲光が兼ねることになった。憲光は宗光の菩提を弔うために「全久院」を建立した。その後、憲光は仁連木城を修築し、嫡子戸田政光を田原城主と兼ねさせた。さらに政光の嫡男康光が田原城を兼ねながら仁連木城を大改修し次男宣光に譲った。宣光は今川方に属し、実質仁連木戸田の始祖となった。なお、田原戸田氏は四代康光・五代堯光による竹千代強奪事件で今川義元に滅ぼされ、戦国大名戸田氏の七十年の幕を閉じた。ここに、戦国大名として名を残そうとした本家田原戸田氏と、当時は分家であり、戸田氏の名を残すことを宿命と考えた仁連木戸田氏の生きざまの相違が表れる。

その後、仁連木戸田氏の宣光は重貞に城主の座を譲った。桶狭間の戦いで今川義元が亡くなるや、重貞は義元の後を継いだ氏真が大名としての器でないことを見ぬき、松平氏に寝返った。かつては身内である田原戸田氏が今川氏から攻撃を受けたときも今川氏に忠誠を通して動かなかった仁連木戸田氏であったが、とうとう今川氏を裏切る時がやってきた。その後、仁連木城主は嫡男が継承し、康長の時には武田信玄の仁連木城攻撃にも吉田城主酒井忠次の救援を得て城を守りぬいた。康長は関ヶ原の合戦では先陣として大垣の城を落とし、大坂の陣などでも多くの武功をたて、元和3(1590)年に松本七万石を拝領して、松本戸田氏となったのである。その後仁連木・松本戸田氏は十八代にわたり幕末まで継承され、明治になり、松本藩の知事にもなっている。

地域に生きた戦国武将を取り上げることで、子供が歴史を身近に感じ、切実感をもって追究することが考えられる。また、絶対的な力をもつ大名がいない東三河の諸大名を取り上げることで、戦国時代の不安定さをとらえることができる。と同時に他の大名とのかかわりの中で時代や事象を考えることにつながるであろう。

○仁連木城

仁連木城は、明応2(1493)年に田原城主戸田宗光により築かれた。この地を選んだ理由は、渥美半島から北方進出するに際して、今川氏の船形山城に対抗するためとも、またその頃、今川氏を後ろ盾に豊川左岸に勢力を伸ばしてきた牧野古白の動きに対するためであろうとも伝えられている。その後、仁連木城は今川・松平(徳川)・牧野・戸田の諸勢力の攻防の渦中に巻きこまれた。田原戸田氏が滅亡の際には仁連木戸田氏は今川氏に属し、家康の吉田城攻撃の際は徳川氏に内応するなど、その動きは複雑であった。武田氏が吉田に攻め込んだときは再三にわたり戦闘が繰り返された。

戦国時代を学習する上で、子供たちにいちばん身近な素材が仁連木城であろう。また、仁連木城と松本城をつなげて考えさせることができれば、激しい時代を生き抜いた戸田氏の変遷を感じることができるであろう。

○竹千代強奪事件

戸田氏の運命が大きく揺れたのは、松平氏の勢力が弱まった戦国中期である。戸田氏や牧野氏を抑え、三河を統一しかけていた松平清康の急死により、その影響力には陰りが見え始めていた。清康の後を継いだ松平広忠は、織田氏の圧迫を受け、嫡男の竹千代を今川氏の人質に出すことを条件に後援を申し入れていた。この時、竹千代の今川領・駿河国までの護衛を命じられていたのが田原戸田氏である。当主の戸田康光は、三河における有力な戦国武将であったが、前年、今川義元に一門の戸田宣成が今橋（吉田）城で滅ぼされたことを深く恨み、今川氏を裏切り、尾張の織田氏に救いを求めようとした。康光は竹千代を今川氏に送ると見せかけ、織田氏に届けたため、今川氏の追討を受け、康光・堯光は討ち死にした。分家して仁連木戸田氏をたてていた康光の次男宣光は、今川氏に忠誠を誓い（嫡男である重貞を人質として出す）、動くことはなかったため、滅亡をのがれた。

戦国大名として生き残ろうと画策して滅びた田原戸田氏の思いを考えることで、命よりも優先するものがあるという、現代の価値観とは違う当時の判断基準をとらえることができるであろう。一方で、竹千代強奪事件は、田原戸田氏だけの思いだけで語り尽くすことはできない。事象をより深く理解するために、身内の滅亡を横目に敵方に組しようとも、決死の思いでお家を存続させる道を選んだ仁連木戸田氏や、周辺大名の立場等、多面的な追究が展開されるであろう。

○松平氏への鞍替え

今川義元が上洛を目指して大軍を率いて尾張に侵攻したが、桶狭間の戦いで織田信長に討たれた。その後、義元の嫡男氏真は、家康からの再三の仇討要請を受け入れなかったため、信長と同盟を結んだ家康は今川氏から独立を果たした。戸田宣光のあとを継ぎ、仁連木城主となっていた重貞も氏真を見限り、徳川家に従属して、東三河の国人に対しても徳川に味方するよう勧めた。この決断が仁連木戸田のその後の運命に大きく影響したことは言うまでもない。しかし、その心中を察するに、相当な覚悟であったことも確かであろう。すなわち、竹千代強奪事件で身内である田原戸田氏が滅ぼされた際、疑いを晴らすために今川方に人質まで出してひたすら忠誠を誓って動かなかった彼らが、同じ今川方から独立し、信長と手を結んで間もない松平元康（のちの家康）に一族の運命を託そうとしたのである。その後の今川攻めや長篠の戦で最先鋒を担われ、古参の家臣たちとの軋轢もあつたに違いない。それでもお家を存続させる道を選び、その後も家康の家臣として懸命に生きる戸田氏の姿から、決断とは、決断自体にも相当な覚悟と責任を伴うが、決断を下した後、決断が正しかったと言えるように動くことこそ重要であると考えたに違いない。

寝返ることは戦国武将が生き残るための常套手段とはいえ、仁連木戸田氏も、生き延びるためには、つねに生か死かの究極の選択を迫られ、まさに苦渋の決断を繰り返してきた。一見すると、この松平氏への寝返りもただ一貫性のない主従関係のようにも見えるが、戸田氏のおかれた状況や思いを丁寧に探った時、お家の絆をつなぐ、決して途絶えさせないと背水の陣で必死に生きる当時の戦国武将の気概を感じ取ることができる。また、この時の決断は、松本城主への出世と強いつながりを感じ取ることができ、子供が決断と結果を結びつけて考えることに適していると言えよう。

（３）指導観

◇利害の異なる他者の存在についてとらえさせる

不安定な東三河の戦国時代を生き抜いた戸田氏を教材化し、戸田氏をはじめ戸田氏とかかわる諸大名の立場や思いを追究する単元構成にする。そうすることで、ひとつの歴史事象にかかわる人々に様々な思いがあることを知り、より深く歴史事象をとらえる目を育てることができる。その際、他大名とのかかわりをより鮮明にとらえさせるために、年代に応じた勢力分布図等、当時の諸大名の動きや時代の流れがわかる自作資料を作成し、子供たちの思考の手助けをする。

◇友達とより深くかかわらせるために、個々の確かな足場をつくる

東田校区は、仁連木戸田氏の出発点の地である。子供たちに問題意識をもたせて学習させるために、自分たちの住む校区に縁のある武将や城・寺院を取り上げる。まず、単元導入に仁連木城址を見学させることで、学習意欲を高め、歴史学習における現地調査の楽しさを味わわせたい。実際に見学に出向き、現地で二川本陣資料館の高橋学芸員から当時の様子やいかに重要な地に建てられたか等の話を聞くことで、まさに歴史を身近に感じ、地域に生きた戦国武将の行く末や彼らが生きぬいた戦国時代への追究意欲を高まるものと思われる。

次に、学芸員から専門的な知識を得ることで、より事実に基づいた追究によって個々の思いや考えを構築させたい。また、レプリカに触れることや見学を通して、より豊かなイメージをもって事象を考えることにつなげていきたい。こうした考えの拠りどころとなる確かな根拠をもつことは歴史学習の基本であり、互いの学びを問い合う素地となるであろう。

戸田氏に関しては、東三河地方の一武将として戸田氏を独立して取り上げるのではなく、つねに中央史とリンクさせながら学習を進めていく。それは、自分たちが学習している校区の歴史が特別なことではなく、戦国時代の日本ではどこでもおこっていたことであることをとらえさせるためである。そのために、中央史と戸田氏の変遷と東三河のその他の武将たちの動向を併記できる年表を作成し、学習の進行状況に合わせて記入し、確認することで、地方史と中央史は連動していることを意識させたい。

◇その時々判断と結果をつなげてとらえることで、決断の重大さを考えさせる

子供たちは、歴史学習の際に、とかく現代の価値観で物事を判断しがちである。まず、当時の価値観に立って考えさせるために、戦国時代の背景を明らかにしなくてはならない。それは、下剋上であり、政略結婚であり、戦国武将の目指していたもの等、戦国時代の特徴的な事柄を通史でおさえさせ、現代のように人権が保障され、命が大切にされた時代ではないことを理解させる。その上で、様々な制約の中、幾多の決断を迫られていた中でも、後世から見て大きなターニングポイントとなった決断を焦点化し、その決断に至る並々ならぬ思いや覚悟、また、決断を正当化させるためのその後の努力を考えさせることで、ひとつの決断の重さをとらえさせたい。

もともと田原戸田氏と仁連木戸田氏は同族である。戦国大名として生き残ろうとしたがかなわず滅ぼされた本家田原戸田氏と、本家が滅亡する姿を目の当たりにし、一族の存続をかけて必死に生きぬく分家仁連木戸田氏を対比させる。言わば、本家が分家に託す思い、その本家の思いをひしひしと感じ取り、懸命に耐え忍んで生き延びなければならない分家の思いをとらえることができる。本単元では、より厳しいと思われる、敢えて生き延びる決断をした、分家仁連木戸田氏が目で課題を追究することで、戦国時代を必死に生き残ろうとした戦国武将の生きざまに触れさせたい。

[教師支援]

※1 校区誌「あずまだ」P1～P6までを読み、はじかみヶ原に関係することを話あわせる。

どうして騎馬戦・鈴割りのことを「はじかみヶ原の戦い」というんだろう（一人調べ、話し合い）①

- ・はじかみって、しょうがつっていう意味なんだよ。
- ・校区誌「あずまだ」に詳しいことが書いてあったよ。
- ・徳川家康と武田勝頼が新城で戦うとき、ここでも争いがあったみたいだよ。
- ・仁連木城って、関係があるのかなあ。
- ・この頃って、戦国時代っていうみたいだよ。

※1

はじかみヶ原の戦いって、戦国時代のこのあたりの戦いと関係があるみたいだね。
仁連木城って、戦国時代にできたお城みたいだから、行けば何が分かるかもしれないね。

※2 仁連木城についてのイメージを自由に発言した後、想像図を描かせる。

仁連木城って、どんなお城だったのかな（城の想像図を描く）②（話し合い）③

※2

- ・4階建てくらいじゃないかなあ。
- ・下に石垣があると思う
- ・しゃちほこみたいなのがありそう。
- ・木の柵とか、橋、みぞがありそう。
- ・高いところに建っていて、窓は少なそう。
- ・出入り口は少なく、縦に大きいけど横は小さそう。

みんなが発表したような立派なお城だといいな。どんなところなのか、早く見てみたくなかったよ。

※3 仁連木城の概要、立地状況、戸田氏の大まかな様子をつかませるために、二川宿本陣資料館学芸員の高橋さんをゲストティーチャーとして招き、話してもらう。

仁連木城に行ってみよう（学芸員の話、仁連木城の見学）④⑤（話し合い）⑥

※3

- ・想像していた立派なお城じゃなくて、残念。
- ・1493年に戸田宗光という人が建てたんだ。
- ・平らなお城だったんだ。
- ・戸田氏なんて、聞いたこともない人だな。
- ・天守閣も、しゃちほこもないんだ。
- ・仁連木城って、すごく考えられた場所につくられたんだね。
- ・戸田氏って、田原と仁連木にわかれたんだね
- ・戸田氏ってどんな人なのか、もっと知りたいな。

仁連木城は想像とずいぶん違ったけど、よく考えられた場所に建てられた、すごいお城だったんだね。
仁連木城をつくった戸田氏について、調べたいな。

戦国時代を生き抜いた戸田氏の生き方を考えよう

※4 校区誌「あずまだ」や戸田氏に関する自作資料を用いて戸田氏の歴史を学習させる。調べたことはMy資料としてファイルにはさみ、いつでも自由に見られるようにする。また、下剋上、政略結婚などを学ばせることで、戦国時代の特徴をつかませる。

戸田氏の歴史について調べよう（一人調べ）⑦⑧（発表）⑨

※4

下剋上

- ・仲間になったのに、裏切るなんてひどい。
- ・家来に殺されちゃうなんて、考えられない。

政略結婚

- ・敵同士で結婚するなんておかしい。
- ・好きな人と結婚できなくてかわいそう。

戦国武将

- ・この豊橋でもいっぱい武将が戦っているんだ。
- ・仁連木の戸田氏は、田原の戸田氏から分かれてできたんだね。

竹千代強奪事件

- ・何で竹千代を強奪したんだろう。
- ・何で竹千代を織田氏に送ったんだろう。

家来に殺されたり、敵と結婚したり、戦国時代ってすごい時代だったんだね。
それにしても、強い今川氏を裏切って竹千代を強奪したのは何でだろう。

※5 田原戸田氏の行動は無謀なものではなく、生き残るために熟慮した結果であり、田原戸田氏からみたら当然の結果であることをおさえる。

どうして田原戸田氏は竹千代を強奪して織田氏に送ったんだろう（一人調べ）⑩（発表）⑪

※5

織田氏・戸田氏・松平氏で今川氏に対抗するため

- ・織田に送って松平とも手を組めば、今川と対等に戦うことができる。
- ・戸田氏だけだとやられちゃうけど、織田氏も味方にすれば勝つことができるかもしれない。

今川氏と松平氏が手を組んだら困るため

- ・西三河まで今川氏の勢力になるから、そのままとやられてしまう。
- ・地図で勢力をかきこんで見ると、戸田氏の領土がぐるりと囲まれてしまっ

今川のことをうらんでいるため

- ・船形山の戦いでひいおじいさん（戸田宗光）が殺され、1546年には吉田城にいるおじいさん（宣成）が殺されるなど、今川氏に身内を殺されているから、恨んでいる。

織田氏の方が今川氏よりも強い

- ・今川氏よりも石高があるってことは、お金があつて、戦力も整っているから。

※6

※6 次に仁連木戸田氏の思いを考えさせるために、田原戸田氏を助けに行かなかった仁連木戸田氏の行動をおさえる。

生き残るために一生懸命考えた末の決断だったんだね。それにしても、身内が戦ってるのに、仁連木戸田氏は冷たいなあ。

※7 勢力図などから、助けに行きたくても行けなかった状況をおさえ、自分の命が惜しくて今川に服従したのではなく、家を残すために苦渋の決断をしたということをおさえる。

どうして仁連木戸田氏は田原戸田氏を助けに行かなかったんだろう（一人調べ）⑫（発表）⑬

※7

行きたくても行けなかったから

- ・行って仁連木を留守にしている間に今川氏に城を奪われてしまつては困る。
- ・助けに行きたいけど、自分たちが行って全滅したら、もう戸田家がなくなってしまう。

戸田家を残したかったから

- ・父や兄を見捨てるのはとてもつらいけど、戸田の名前をなくしたくなかったから。
- ・田原に「俺たちの分まで生き抜いてくれ」と、言われていたのかも。

もう関係がないから

- ・一度田原と仁連木に分かれたんだから、もう関係ない。
- ・田原は田原、仁連木は仁連木で生きていけばいいから。

死にたくなかったから

- ・やっぱり自分たちは死にたくない。
- ・行ってもやられて全滅してしまうんだら、行かずにここでひっそりと生きている方がいい。

※8

※8 田原戸田氏が滅んだ後の勢力図に注目させて、仁連木戸田氏の置かれた状況について考えさせる。

仁連木戸田氏にとってもつらい決断だったけど、戸田家を残すためには最善の決断だったんだね。
その後仁連木戸田氏はどうなったんだろう。

生き残った仁連木戸田氏の宣光・重貞父子は、どうなったのかな（一人調べ）⑭（発表）⑮

※9

戸田宣光

- ・戸田家を守るために、今川氏の家来になったんだね。
- ・きつとすごくすまないと思いながら息子や奥さんを人質として差し出したんだろうな。
- ・今川氏のために、何度も一生懸命戦っているね。
- ・あんなに強かったのに桶狭間の戦いでやられちゃったなんて、びっくりしちゃうよ。

戸田重貞

- ・11歳で人質に行くなんて、いやだったろうね。
- ・ずっと今川氏に忠誠を誓っていたのに、松平氏に寝返ったんだね。
- ・父や兄を今川氏に殺されたうらみがあるから、寝返ったんじゃないのかな。
- ・今川を裏切り、松平軍で戦って死んじゃうなんて…

あれほど今川氏に忠誠を誓っていたのに、松平氏に寝返ったんだね。
今まで味方だった今川氏と、どんな思いで戦ったのかな。

今川氏から松平氏へ寝返った戸田重貞は、どんな思いで戦い、死んでいったんだろう（一人調べ）⑩⑪（発表【本時】）⑫

※ 10

※ 10 寝返りを選択した戸田重貞は、吉田城の戦いで何を思い死んでいったのか、彼の思いに迫ることで仁連木戸田氏の決断の重さについて考えさせる。

【戦っているときの思い】

今川氏に今までのうらみを晴らしてやろう
・今までに殺された祖先の無念をここで晴らしてやる。

松平氏のために必死になって戦おう
・松平氏が今川氏にかわってこの地を支配するためにも、がんばろう。

もう後には引けない
・今川氏を見限って松平についたのだから、ここで必死に戦わないと。

松平氏に信頼してもらうためにがんばろう
・一番信頼されるためにも、一番危険なところで戦おう。

【死んでいくときの思い】

今川と戦うことができて満足だ
・ご先祖様のために戦うことができたのだからもう悔いはない。

子どもたち、あとのことは頼んだぞ
・俺は松平氏のために戦って死ぬ。お前たちも松平氏のために働けよ。

このあとの戸田家は果たして大丈夫なのだろうか
・俺が死んだら残るは6つの家長だが、果たして大丈夫だろうか。

まだ死にたくなかった
・松平氏は戸田家を滅ぼしてしまうのではないだろうか…心配だ。

重貞は、自分の命を犠牲にしてまでも戸田家を残すために戦ったんだね。
重貞のおかげで戸田家は生き残ることができたけど、その後の戸田氏はどう生き抜いたのかな。

※ 11 自作資料を用いてその後の戸田氏の歴史を学習させる。

松平氏のもとで、戸田氏はどのように生き抜いたのだろう（一人調べ）⑬⑭（発表）21 ※ 11

	松平氏の動き	戸田氏の動き
1568年 1575年	遠江で今川氏真と戦う はじかみヶ原で武田勝頼と戦う 長篠の戦い	康長の叔父が共に戦う 康長の叔父が共に戦う
1578年 1590年 1600年	遠江で武田勝頼と戦う 江戸城に入る 関ヶ原の戦い	康長の初陣 武蔵国深谷で1万石の大名になる 大垣城を攻める 上野国白井城2万石の大名になる 先陣をつとめる 自ら槍をとって勇敢に戦う 松本7万石松本城主になる 松本に全久院を建てる
1614年 1615年 1617年	大阪冬の陣 大阪夏の陣	

- ・戸田氏は、松平氏と一緒に戦っていったんだね。
- ・最後には松本城主になったなんて、すごいね。
- ・長篠の戦いや関ヶ原の戦いでも一緒に戦ったんだ。
- ・松本に建てた全久院って、東田の全久院と関係あるのかな。

康長は家康とともに戦って、信頼されるようになって、最後は松本城主になったんだね。
松本に全久院を建てただけで、仁連木の全久院と関係あるのかなあ。全久院に行けば、何が分かるかなあ。

※ 12 今も東田の地と戸田氏は結びついていることを感じさせるために、仁連木全久院へ行き、住職にだれがまつられているのかを話してもらう。

仁連木の全久院に行ってみよう（見学）22（話し合い）23 24 ※ 12 ※ 13

- ・今まで勉強した人たちがここに葬られているんだ
- ・仁連木の全久院の方が先に建てられてたんだ
- ・東田校区って、すごい校区なんだね
- ・仁連木に眠っているご先祖様を動かすことはできないから、同じように寺を建ててお参りしたかったのかな。
- ・仁連木を忘れないようにするためにたてたんじゃないかな。
- ・松本城主にまで出世しても、スタート地点の仁連木を大切に思っていたんだと思うな。

※ 13 戸田氏にとってこの地がいかに重要な地であったかを理解させるために、今までの資料や学習したことを振り返らせる。

全久院も戸田氏と関わりのある建物だったんだ。
松本に全久院を建てたのも、始まりの地である仁連木を忘れないようにするためなんだろうね。

ぼくたちの校区には、戸田氏っていう、戦国時代をさまざまな決断を下しながら生き抜いた戦国武将がいたんだ。
ぼくたちもこれからやってくる様々な選択を、考えて行っていくかなとね。
そして、戸田氏が命がけで守り抜いたこの東田校区を、これからも大切にして過ごしていきたいな。

5 本時の授業

○ 目標

- ・ 背水の陣で松平氏に戸田家の将来を託した重貞の生きざまに迫ることで、家を残すために自らの命を犠牲にしてまでも重大な決断をする戦国武将の生き方をとらえることができる。

○ 準備するもの

教師…鎧、火縄銃 児童…学習をまとめたファイル

○ 展開

時間	学 習 の 流 れ	※教師支援	★評価
5	○前時までの流れの復習をする。 ○本時の課題を確認する。 今川氏から松平氏へ寝返った戸田重貞は、どんな思いで戦ったんだろう ○課題についての自分の考えを発表する。 13本塚の悲劇 ・ このまま今川についていてもいつかは母も殺されてしまうかも。 今川氏へのうらみを晴らそう ・ 今までの敵討ちをしたい。 ・ 今川を倒したい。でも、自分が今川に殺されるのも覚悟していたと思う。 ・ 母親まで人質に出させるなんて。 今までの戦い ・ 船形山の戦い→宗光討死。 ・ 1546年→宣成見殺し。 ・ 竹千代強奪事件→康光・堯光討死。 ※殺される覚悟とはどういうものかを実感させるために、火縄銃と鎧の実物を見せ、重貞の思いに触れさせる。 桶狭間の戦い ・ 今川義元が敗れてしまったから。 ・ 桶狭間の戦い以降も今川軍は負けているから。 もう後には引けない ・ 今川氏を裏切ったことをしてしまったから、全力で戦うしかない。 ・ 覚悟をして戦う。 ・ もう徳川の家来になったんだからもう今川には戻れない。 さらなる人質要求 ・ 桶狭間で敗れてから、寝返りを恐れてさらに人質を出すように要求したから。 清洲同盟 ・ 織田と松平が手を組んだから。 松平軍の勢い ・ 義元が死んだ後の今川軍に勝っているから。 今までの経緯 ・ 今までも裏切っていた。(船形山の戦い)(1529年)(竹千代強奪事件) ※子どもたちの考えが明確になるように板書で思考を整理し、子どもたち自身にも振り返りやすくさせる。 松平氏に信用してもらいたい ・ 信用してもらうためには、戦いで活躍しないといけない。 ・ 徳川の信頼を得るためにもがんばって戦おう。 ・ 死なないで、生きてまた松平のもとで戦いたい。 死め覚悟はできていた ・ 今川を裏切って戦うんだから、覚悟はできていた。 ・ 鉄砲で死んだんだから、かなり前の方で戦わないと。 ・ だから覚悟していたと思う。 ・ 死ぬことで「これだけ一生懸命やった」ということを証明し、信頼してもらいたかったと思う。 ※思いを発表するときに、なぜそのように思ったのか、自分の思いの根拠となる歴史的事実もあわせて発表させる。 ★今までの一人調べをもとにして、重貞の思いについて自分の言葉で発表することができたか。(発言) 生き延びようとしていた ・ 自分が死んだらその後を見ることができない。 ・ 死ぬのはくやしい。自分を仲間に入れてくれた徳川氏のためにもっと活躍したい。 ・ 生きてもつてがらを立てたい。 ・ やっぱり死にたくない。 ※子どもたちから「死め覚悟ができていた」「生き延びたかった」という意見が出てきたときに、重貞は本当はどのように思っていたのか問いかけてみる。 ※どちらも戸田家を残すために考え抜いた決断であることを理解させるために、両方の意見を見比べさせる。 ・ 戸田氏の今後を思い、戸田氏のために一生懸命戦ったんだ。 ・ 死んだことはくやしいかもしれないけど、それでも自分の決断を信じて戦ったんだから、悔いはないと思う。 戸田重貞は、戸田家を残すために、自分の命をかけて戦ったんだ。すべは、戸田家を残すための決断であり、行動だったんだね。 今日の授業を振り返ってみよう		
40	・ 松平に寝返るということは、また一から全てをはじめないといけないので、すごい苦労があると思う。それなのにそんな決断を下した戸田重貞はすごいと思う。 ・ やっぱり一度裏切った人間は、命をかけて行動しないと信頼されないのかなあ。自分にそこまでの決断ができるのだろうか。 ・ 厳しい決断をしたけど、それを守ってその後も生き抜いてきたこともすごいと思う。 ・ この時代はいやだからといって逃げることができない。その中で決断を迫られ、生きていくことはやっぱりすごい。ひょっとしたら、死ぬ方が楽なのかもしれない。それだけ生き抜くことは大変だし、すごいことなんだと思う。 ・ 決断を間違えたら死んでしまうこの時代で、生き抜くために一生懸命考えた戸田氏はやっぱりすごいと思う。 ・ 重貞によって続いていくことになった戸田家は、この後どうなっていくんだろう。仁連木城はもうないから、ここで終わってしまったとしたら、重貞のがんばりは意味がないのかもしれない。 ※今日の授業で出てきた意見をもとに、自分ならどうだろうかという視点で振り返らせる。重貞の決断についてどのように思うのかを考えさせるために、「決断」「思い」といった言葉を文章の中に入れるように伝える。		
45	★友達の発言を聞いたり、自分で考えたりしながら、重貞の決断の重さやそれを実行するための覚悟について考え、気づくことができたか。(発言)		

○ 評価

- ・ 命をかけて戦った重貞の行動は、戸田氏を残すためであったことに、戸田氏のおかれた様々な状況や思いをもとにした話し合いからとらえることができたか。